

## 産業・地域の文化的創造とブルーツーリズム

—— 辺境を文化交流拠点へ変える蒲江・北浦大漁海道（日豊海岸）に学ぶ——

十 名 直 喜

### 〈目次〉

- 1 はじめに
- 2 ブルーツーリズムへの着眼
- 3 「日本風景街道」と「みち」文化の再生
- 4 「日豊海岸シーニック・バイウェイ（蒲江・北浦大漁海道）」の構想と枠組み
- 5 ブルーツーリズムの多彩な展開と地域づくり・人づくり
- 6 産業と地域の文化的な再生・創造
- 7 おわりに

### 1 はじめに

大分・宮崎の両県にまたがる日豊海岸国定公園は、九州山地が沈水して出来たリアス式海岸が続いている。北部は豊予海峡に面して半島や湾入の出入りが大きく、蒲江から南は肢節が細かく、多島海の景観を呈している。黒潮の支流が四国側を北上し、反転して日豊海岸を南下する。このため、水温が高く透明度もあり各種サンゴ類（テーブルサンゴ、菊目石、緑石）などが生育するなど海中公園が多くあって、海中景観も魅力がある。

風光明媚なこの地ではあるが、公共交通機関としての鉄道という面からみると、別の顔も見える。

九州東部沿岸を縦断する日豊本線（小倉～鹿児島、全長467km）は、新幹線開通などで注目される西部の鹿児島本線に比べて、整備の遅れが目立つ。その象徴とみられるのが、日豊本線の間あたりに位置する佐伯～延岡間（85km）である。少し内陸部を通り、普通列車は日に3本（朝夕）のみで10時間以上の間隔が開き、

日に13本走る特急列車の停車駅もなく、生活の足としては不便を極める。そうした「陸の孤島」をつなぐのが道路（ハイウェイ、バイウェイ）で、海岸に沿って縫うように走っている。今や、自動車が生活の足、交流の足として欠かせぬ役割を担っている。

大分県南端に位置する佐伯市と宮崎県北端の延岡市の間は、複雑なリアス式海岸が続き17の浦があって、古くから基幹産業である漁業を通じて交流がなされてきた。近年では、そうした独自の文化としての浦文化を大切にしながら、ブルーツーリズムを手がかりに相互の地域の交流・連帯を図り発展させていこう、という取り組みが注目を集めている。「蒲江・北浦大漁海道」（「日豊海岸シーニック・バイウェイ」）が、それである。

春の足音が日ごとに高まる2009年3月5日、サステイナブル産業・地域研究会の5名は、早朝に宮崎を発ち、午前中に北浦、午後蒲江の見学調査を行った。「辺境の地」とみられる地域ではあるが、豊かな自然資源およびそこで育まれた固有な伝統文化に恵まれた地域でもあ

る。しかも、ブルーツーリズムを軸に地域の再生に取り組む地域住民の創意的な試みによって交流拠点へと変貌しつつあり、都心部では得難い地域資源とその文化的活用パワーの大きさに目を見開かされた。

小論は、そこでの見学調査をベースにブルーツーリズムという切り口からアプローチし、産業と地域の文化的な再生・創造の貴重なモデルとして考察したものである。

## 2 ブルーツーリズムへの着眼

### 2.1 ブルーツーリズムとは何か

「ブルーツーリズム」といっても、耳慣れないが、なかなか魅力的な響きをもつ言葉である。しかし、最近の新しい言葉のようで、グリーンツーリズムやエコツーリズムなどに比べて市民権を得ているとはいえず、辞書にもほとんどみられない。

ブルーツーリズムが公式に登場するのは、1998年のこととみられる。国土交通省と水産庁は同年、「漁村滞在型余暇活動」をブルーツーリズムとして、小冊子「ブルーツーリズム推進のための手引き書」ならびにパンフレット「ブルーツーリズムの魅力」を発行した。地域の漁業や美しい自然景観、伝統文化など多様な諸資源を活かし、都市住民などに多様な余暇活動を提供するといったブルーツーリズムを通して、漁村地域の活性化を図ろうというものである<sup>1)</sup>。

都市住民に海に関する新たな見方・楽しみ方を提案し、彼らにとって海が「レジャーの場」から「ふるさと」になるような交流を推進する。

また、都市住民との交流を通じて、地域住民が自らの地域価値の再発見・再評価を行い地域の再生に結びつけるとともに、漁業・水産業など地場産業を観光産業などと組み合わせることによって産業再生あるいは産業創造を促そうとするものである。

### 2.2 ブルーツーリズムによる経営・地域再生モデルー石川県「さざなみ鮎網」ー

最近では、ブルーツーリズムも全国各地で多様な形で見られるようになってきている。筆者が、ブルーツーリズムに接し興味を覚えたのは、2009年1月下旬のことである。その頃に放映されたテレビ・ドキュメンタリーで、ブルーツーリズムによる経営・地域再生の先進的取り組みが紹介され、それを目にする事ができた。

石川県の「さざなみ鮎網」社長・勝木省司氏の、ブルーツーリズムを軸にした経営・地域再生の取り組み、漁業を何とか魅力あるものにしようとする熱意と創意工夫に富んだ努力にスポットをあてたもので、いつもとは一味違う感銘を受けた。

勝木氏が社長を継いだとき、会社は赤字経営で休日もなければ目標もなく、「背中を見て覚える」式のやり方に若者は次々に辞めていくなど、さんさんたる状況であった。そこから、彼の経営刷新が始まる。

まず、日曜日を定休にするなど労働時間の短縮を図る。次に、複雑な定置網の仕組みや、その網の補修方法など、漁の技術をきちんと教えるようにした。さらに、社会人としての常識も身につけさせようと、月に1回の一般テストも実施する。漁港そのものを観光資源にしようと、遊覧船を運航させて漁の勇壮な様子を観光スポットにした。取った魚を安く直接販売する場も設けており、10分で売り切れという盛況

1) 「ブルーツーリズムとは」<http://www.mlit.go.jp/crd/chirit/blue-t/bt.htm>。

であるが、その後で反省会も開くなど漁師が直にお客さんの反応を知る機会としている。岸壁には、芸術家の卵に漁等の絵を自由に描かせ、これも人気を呼んでいる。

会社の人気は急上昇に転じ、今や若者が次々入社する人気企業に変身したとのことである。こうした経営のあり方は、他産業や経営・地域でも大いに参考になるのではなかろうか。

## 2.3 東九州のブルーツーリズム―「蒲江・北浦大漁海道」―

これは面白い！そこで、今回調査の対象にした東九州を中心にインターネットで検索するなか、北浦と蒲江のブルーツーリズムを知ることができた。

大分県（南端）佐伯市から宮崎県（北端）延岡市に至る海岸線は、複雑なりアス式海岸に恵まれ、17の「浦」<sup>2)</sup>がある。これらの浦は、それぞれ独自の浦文化を持ちながらも、旧町時代から基幹産業の漁業を通じて交流が盛んであった。これらの浦と浦を結ぶ海道は、今日、「蒲江・北浦大漁海道」と呼ばれ「日本風景街道」に登録されている。そこでは、独自の文化としての浦文化を大切にしながら、お互いの地域を発展させていこうという取り組みがみられる。

## 3 「日本風景街道」と「みち」文化の再生

### 3.1 日本の国土と地域文化にみる多様性と価値

日本国土は、国際的にも特有な構造をもっている。南北に長く延びる日本列島、急峻な山脈

2) 「浦」は、「海や湖の、湾曲して陸地に入り込んだ所」（『広辞苑』）を指すが、さらに生活と生業の場を含めたものとして、より広義に捉えることができる。

といくつもの河川、変化に富んだ長い海岸線、美しい島々を有し、亜寒帯から亜熱帯までの気候のなか、変化に富む四季や美しい自然、多様な動植物に恵まれてきた。

美しい国土づくりは、2千年に及ぶ稲作文化を中心に行われ、森林・山の文化、川・海の文化など国土にまつわる多様な地域文化が培われてきた。こうした国土文化は、目先の経済効率主義やグローバル化の下で崩壊の危機に直面している。

一方、国民の意識も大きく変化しつつあり、ゆとりや安らぎ、心の豊かさへの希求、美しい自然、景観や文化芸術、歴史などへの関心の高まりがみられる。都市圏では、古い街並みの保存、暮らしの場としてのゆとり創出、都市景観への配慮、ユニバーサルデザインへの関心が高まり、地方においても観光・地場・農林水産業などの分野で地域独自の資源を魅力あるものとして活用する動きが出てきており、都市住民からも注目され始めている。

### 3.2 「みち」の文化・機能と地域

「みち」は、「道」のみならず「路」、「途」、「径」など多様に表現され、その意味も多岐にわたる。往来・通行するところ、目的地に至る途中、みちのり、道理、教義、分別、手法、分野など<sup>3)</sup>。

日本の国土文化において、「みち」は交通機能のみならず、地域住民にとっては生活の場であり、大切な交流の場でもあった。「みち」は地域コミュニティの創出や、人・物・文化の交流、新たな文化の創造を促すなど、地域文化の醸成の一翼を担ってきた。いわば、国土文化の「編集装置」としての役割を果たしてきたといえる。

3) 『広辞苑』の「みち」参照。

しかし、高度成長を経て、都市的な効率性優先の文化に偏った社会構造へと変化するなか、「みち」は多様な意味と文化を奪われていく。いつしか「みち」は、「車を通すだけの道具」と見なされるようになった。公共空間である「みち」と沿道との隔たりは顕著になり、「みち」への愛着と関心が希薄になるにつれて、地域への愛着や誇りも薄れていく。やがて、「みち」と沿道の景観も乱れが目立つようになっていった。

### 3.3 「日本風景街道」の設置

「日本風景街道」は、地域住民、企業、行政など官民が協働で全国に美しい風景を広げていくために、歴史、文化、伝統、心、風景を大事にし、地域の人々が楽しく交流できる仕組みづくりを目的として設置されたものである。

「日本風景街道」は、自然・景観・歴史・文化資源など様々な地域資源のみならず、道路ならびにその沿道や周辺地域を舞台とした多様な主体による活動そのものや、その活動によって形成される多様で質の高い風景などを、包含した概念である。

日本風景街道を構成する要素としては、「地域資源」、「活動主体（日本風景街道パートナーシップ<sup>4)</sup>）」、「活動内容」、「活動の場（中心となる道路など）」があり、それらを総称して「風景街道」という。

2005年12月に、日本風景街道戦略会議（委

---

4) 活動主体としての「日本風景街道パートナーシップ」とは、個々の風景街道ごとにつくられ、活動を実施する「体制」のことである。「体制」は、地域住民やNPO、町内会、企業、大学関係者、警察、市町村などの地方公共団体など「活動に応じて必要な組織」と「道路の管理者」でつくられる。

員長：奥田碩・日本経団連名誉会長）が設置され、全国から応募があった75のモデルルートへの視察・調査を経て、2007年4月には提言（「日本風景街道の実現に向けて—美しい国土景観の形成をめざした国民的な運動を—」<sup>5)</sup>）が取りまとめられた。

こうした動きは、「美しい国づくり内閣」を掲げて2006年9月に発足した安倍内閣の下で加速され、内閣が1年の短命に終わった後も、その流れは全国各地に広がりを見せている。

### 3.4 「九州風景街道」の取り組み

一方、九州では各地において、人々の暮らしや歴史・伝統に根ざした極めて優れた風景資源を多数有し、その保全や高度化に向けた様々な取り組みが始まっている。

九州風景街道は、暮らしのなかで最も身近な公共空間である「みち」を、もう一度、地域の人々の生活や交流の「場」として提案・活用し、来訪者を含めたより多くの人々の参加を得て、その魅力を地域の人々と行政が一体となって発掘・維持・発展させることをめざして設立された。

2006年2月、日本風景街道モデルルートに応募した8ルートを支援するために、「シーニック・バイウェイ九州戦略会議（準備会）」が発足した。各ルートでは、地域でのワークショップや地域再発見ツアーの開催など様々な取り組みが始まっており、行政も地域の取り組みを支援するためにさまざまな連携を進めている。

日本風景街道への登録は、全国105ルート、

---

5) 日本風景街道戦略会議（2005年12月）「日本風景街道の実現に向けて—美しい国土景観の形成をめざした国民的な運動を—」

<http://www.mlit.go.jp/road/sisaku/fukeikaidou/img/siryou/no4/teigen.pdf>

九州9ルート（2008年12月11日現在）になっている。九州では2007年11月、「日豊海岸シーニック・バイウェイ（蒲江・北浦大漁海道）」が、「日豊海岸きらめきライン」に次いで、2番目に登録された。

#### 4 「日豊海岸シーニック・バイウェイ（蒲江・北浦大漁海道）」の構想と枠組み

##### 4.1 基本的なコンセプト

「シーニック・バイウェイ (scenic-byway)」は、景観 (scene) とわき道 (by-way) を組み合わせた言葉で、「風景街道」と訳される。「みち」を切り口にして、地域づくり・観光振興・美しい景観形成などに取り組む活動を示すシンボリックな言葉でもある。

「日豊海岸シーニック・バイウェイ（蒲江・北浦大漁海道）」の基本的なコンセプトは、「浦ごとにある持続的な海業の連携により、質の高い道路空間づくりを通じた地域振興」である。

中心となる道路の周辺は、風光明媚なリアス式海岸が続き、緑豊かな山々と優しく迎えてくれる人里など、多彩な自然と人々の息づく地域である。こうした中で培われた知恵や匠の技をベースにして産業、歴史、文化が築き上げられ、地域の貴重な資源となっている。それらは、郷土の誇りでもある。このような地域が持つ資源を活かし、自然との共生を図りながら、質の高い道路空間を通じた地域振興をめざしている<sup>6)</sup>。

6) 日豊海岸シーニック・バイウェイ研究会『日豊海岸シーニック・バイウェイ（蒲江・北浦大漁海道）』日本風景街道 登録申請書、2007年11月26日（登録日）。

##### 4.2 活動方針

上記のコンセプトを具体化し展開する活動方針は、次の3つの柱から構成されている。

###### ① 地域の資産の発掘と有効活用

日頃は来訪者の目に触れることなく地元の人だけが知っている美しい自然景観、先祖代受け継がれつつ埋もれている地域資源などを、ロードウォッチング、わいわい懇等の調査活動を通じて発掘するとともに、各地区に点在する歴史・文化資源や自然資源、体験交流資源など、「おしなざい（もったいない）」魅力の再発掘を図る。

さらに、これら一つ一つの資産を有機的に海の細道でつなぎ合わせることで、統一的なテーマに仕上げ、地域全体の付加価値を高めて地域のおもてなしの向上を図る。

###### ② 「海の道」リフォーム

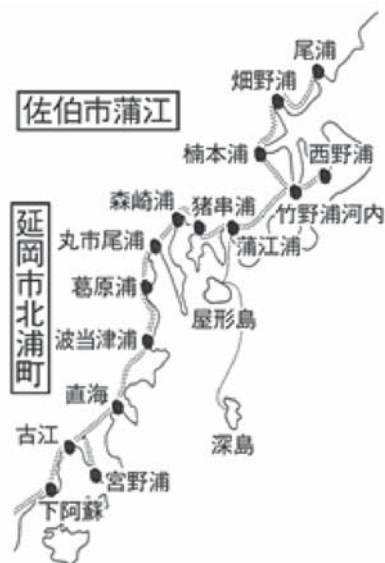


図1 蒲江・北浦大漁海道ルート  
出所：「北浦町総合支所だより」2006年6月号。



漁村集落でもある「浦」は、地域住民の生産と暮らしの基礎単位になっている。この浦と浦、あるいは岬などを結ぶ現在の「道路」は、生活基盤としての性格が強く、機能重視の傾向にある。かつての文化的な多様な価値は、後景に押しやられている感が強い。

そこで、地域資源としての道路の魅力と価値を高めるために、次のような活動を行う。すなわち、素晴らしいリアス式海岸が眺望できるように、ビューポイント区間の路肩の雑草伐採や、道路の清掃活動、草花の植栽運動を展開する。また、海岸美を損なわないための既存看板などの整理や、駐車場、休憩所などの整備を進めることにより、海岸沿いの道と海との空間利用を促進し、沿道環境を向上させる。

こうした取り組みを通して、新たに「なごみ空間」を創出し、利用者がスロードライブを楽しめるような道路空間・景観整備をめざす。

### ③ 県境を越えた地域連携と情報発信

本ルートの沿線は、自然、歴史・文化、豊富な食材などに恵まれ、他に誇れる豊かな資源をもっている。この地域の魅力を十分に発揮するためには、各地区で個別に活動に取り組んでいる人々が（県境等の）行政区域などにとらわれることなく連携を図る必要がある。お互いの魅力を享受できるよう、互恵的な関係を構築し、人、モノ、情報が道路を通じて循環する状況を創出したい。

そこで、県境を越えて連携している「東九州伊勢えび海道」観光キャンペーン活動を柱にして、さらなる地域連携と情報発信を推進する。また、将来的には北は大分市佐賀関、南は宮崎県日向市までに対象を広げ、これら沿線地域の活動団体との意見交換や交流を図る。

### 4.3 風景街道パートナーシップの構成組織

風景街道パートナーシップの組織・団体としては、次のようなものがみられる<sup>7)</sup>。

まず、蒲江地域では、「かまえブルーツーリズム研究会」、「道の駅 かまえ」、「蒲江女性セミナー」、「たかひらの会」、「竹野浦神楽保存会」、「かまえ昼めし祭り会」、「早吸姫会」、「かまえ直送活き粋船団」、「蒲江リサイクル石けん協議会」、「ヤンチョンニーズ」、「蒲江浦浦づくりの会」、「佐伯市観光協会」、「レインボウ」、「橋本正恵応援団」、「New'sの会」、「産地芸能会」、「洲の本・恵美須会」、「あまべ渡世大学」、「日豊海岸ツーリズムパワーアップ協議会」などがあげられており、その多彩さに驚かされる。

一方、北浦地域でも、「きたうらみちばたつうたん会」、「延岡観光協会」、「道の駅 きたうら」、「北浦ブルーツーリズム」、「県北みちもり（道守みやざき会議北部ブロック）」などがあげられている。

その他にも、国土交通省（8部署）および宮崎県（6）、佐伯市（6）、延岡市（7）の各関係部署が名を連ねている。

## 5 ブルーツーリズムの多彩な展開と地域づくり・人づくり

### 5.1 蒲江ブルーツーリズムにみる「辺境」からの挑戦

#### 東京から最も辺鄙な地域

大分県の最南端、東九州のほぼ真ん中に位置する蒲江は、日豊リアス式海岸に面している。幅5km、縦20kmの四角の中に、85kmの海岸線を有し、12の浦が数珠つなかりに連なっている。

7) 日豊海岸シーニック・バイウェイ研究会、前掲冊子。

る。東京からは時間距離が最も遠いところといわれ、数年前に東京のテレビ局が取材にきたほどの辺鄙な田舎である<sup>8)</sup>。

環境がよく大自然に恵まれた地域でもある。青く澄んだ「高山海岸」をはじめ、日本の渚百選の「元猿海岸<sup>もとざる</sup>」や白砂青松百選の「波当津海岸<sup>はとうづ</sup>」など美しい海水浴場に生まれ、さらに仙崎の高台にある「つつじ公園」など折々の見どころが訪問者を楽しませ、初夏には約10万本のハマユウが咲く、日本一のハマユウの里としても知られる。

この辺鄙な景勝の地が、漁業を中心とした「生産地域」からブルーツーリズムを軸とした「交流地域」へ<sup>9)</sup>と、大きく生まれ変わろうとしている。

### 食観光への人気

蒲江ブルーツーリズムの仕掛け人は、「かまえブルーツーリズム研究会」会長の橋本正恵氏(60)と佐伯市観光協会事務局長の古田朝男氏(39)といわれる。1999年の「食観光」がその第一歩であった。

2004年に始めた「伊勢えびまつり」は順調に伸び、07年度(9-11月)には実食数1.2万、経済効果1.2億円に上った。「伊勢えびまつり」は、「東九州伊勢えび海道」へと広がっている。「東九州伊勢えび海道憲章」では、「海業ツーリズム」の推進が謳われている。

### 地域・市民一体の体感講座「あまべ渡世大学」の開設

1次産業に観光の要素を掛け合わせると、交流につながりファンが増えていく。橋本正恵氏は、1996年に蒲江町観光協会長に就任し、古

田氏と二人三脚で活動を進めてきた。佐伯市と合併後の2007年6月には、蒲江全体をキャンパスとした「体感・学び」の大学・「あまべ渡世大学」(学長：橋本正恵)を開設した。生き方<sup>なりわい</sup>や生業を「渡世」と呼び、そこに力点を置いた体感講座を揃えている。講義メニューには、多彩な体験プログラムがみられる。「真珠の核入れ体験とオリジナルアクセサリーづくり」、「ウニ割体験」、「ブリ養殖体験」、「屋形島シーカヤックとお楽しみ講座」、「なまこ池魚釣り体験」、「まるっと一日屋形島」、「伊勢えび捌き方講座」など11種類あり、蒲江の新鮮な食材を使った郷土料理の提供も行っている。講師陣はすべて地元の人たちで、受講者は県内外から訪れている。

渡世大学は、もともと閉校で空いた中学校の校舎を使い、「子どもたちにこの村の産業のすべてを教えたい」との思いを込め、渡世学校として始めたものである。まず、自分たちの孫から手がけた。蒲江の民宿に親子で泊まり込んでの実体験による教育である。産物の名前を覚えさせ、次に産物の風味を体感させてから、調理へと進む。小学6年で創作料理を仕上げると、チャイルドグルメの社会デビューとなる<sup>10)</sup>。橋本氏が提案し、民宿仲間も「土日祝日以外ならいいよ」と受け入れてくれ、まちぐるみの取り組みとなったのである。まさに、他地域に例を見ぬ本格的「食育」のさががけといえよう。

### 天然のブルーパールで地域おこし

見学調査の3月5日午後、あいにく土砂降りの雨となり、予定の「ブリ養殖体験」はできなかった。それに代わって、富栄パールの「真珠の核入れ体験」を楽しんだ。そこでのわが手

8) 「蒲江の魂、ブルーツーリズム」2006年12月7日、([http://gazoo.com/G-Blog/mura\\_kamae/2846/Article.aspx](http://gazoo.com/G-Blog/mura_kamae/2846/Article.aspx))

9) 「蒲江の魂、ブルーツーリズム」、同上。

10) 三浦祥子『海業一橋本正恵的西野浦の物語一』マチまち物語ファン、2006年。

づくり作品（真珠のストラップ）は愚妻に献上したが、携帯電話のストラップとして愛用するなど好評である。

真珠養殖販売の富栄パール（富高満広社長、蒲江）は、希少性の高い天然のブルーパール生産に成功し注目されている。市場には出さず、直接小売をすることで、蒲江を訪れる観光客を増やそうと意気込んでいる。

同社の創業は1955年頃で、2004年の全国花真珠品評会で水産庁長官賞を受けている。ブルーパール生産のきっかけは、1994年以降、全国に広がったアコヤガイの大量死で、独自の対策を施すなか、偶然にブルーパールができたという。県などによると、ブルーパールは、何百粒に一粒程度見つかることはあっても、それを専門に養殖するのは極めて難しいという。同社は、「彩レントブルーパール」と名付けて販売していくことで、県の承認も受けている。世界的な景気悪化で、ホワイトパールは市場に卸しても最盛期の半値以下になっている。「ブルーパールは蒲江の海と山からの贈り物」と富高社長はいう。「知名度を高め、たくさんの観光客が訪れるようになれば、地域全体が潤い、恩返しができる」と話している<sup>11)</sup>。

## 5.2 養殖経営から食・地域情報発信拠点への創意的展開

### 新しい経営スタイルの「かまえ直送活き粋船団」

鉢巻の似合う漁師・村松一也氏は、自社の経営のみならず「かまえ直送活き粋船団」を束ね、インターネットなどを駆使しての新しい経営スタイルを開拓・展開されている。話上手な方である。「ブリ養殖体験」の代わりにと急きょ屋内講座となり、「船団」立ち上げの苦労話な

どに聞き入った。

「かまえ直送活き粋船団」は、国と県の助成(2/3)を受け、10人の出資(150万円×10人=1.5千万円)でスタート(総額5.3千万円)して4年になる。運営は共同で行うが、主として村松氏に任されている。取れたての魚を消費者にどう届けるか、彼らの五感にどう触れてもらうか。それは、辺鄙な地にあってはなかなかの難題であった。

スーパーで売られるような安い商品をつくることは、できなかった。スーパーに置いてもらえたとしても、なかなか大変なようである。島根の定置網漁の例では、1カ月に1日店頭に並ぶのがやつのことで、パンダのようなものという。ものを売りに行くと、自分たち生産者には何も残らない。流通の仕組みがわからず、流通ノウハウもゼロだったので、利益は出せない。

そこで、240万円(=4万円/月×60カ月)投資してヤフーの全国ネット(マイドショップ)に加入し、ホームページを立ち上げてネット販売にチャレンジする。マイドショップでは、顧客管理やメールマガジン、新商品入れ替えなどが簡単にできる。今や、ホームページには300～500人/日のアクセスがみられ、ネット売上は20～100万円/月になっている。船団員への利益配当はMAX10%に限定しており、去年はなんとか利益を捻出できたとのことである。

メルマガは、週に1回程度、発信している。10-20分程度かけて、活き粋船団の新メニューや蒲江の漁・地域イベントなど旬の情報を思いつくまま書く。「楽しみ」「面白い、応援します」といった好反響があり、手応えを感じている。何らかの交流・接触があった方に配信しており、1,100人に上るが配信停止は3%(30人)程度とのことである。

11) 大毎朝読新聞, 2009年2月24日付。



### 村松水産の経営で磨いたノウハウの発揮

村松さんは、村松水産の2代目社長である。蒲江活き粋船団の情報発信・交流のスタイルは、村松水産の経営で培ったものとみられる。2003年2月に、村松水産のホームページを開設し、季節の魚の知識、蒲江の海の様子、航海日誌など、消費者一人ひとりに話しかけるように、楽しく親しみやすい大分弁で伝えている<sup>12)</sup>。

彼は、どんな人間がどんな気持ちでつくっているかを知らせることが、食の安心につながると考える。年末、ブリの宅配をする時もホームページアドレスを付けて、蒲江の町ごとPRしている。「おいしく健康な魚をつくる基本は、魚の身になることだ」という。「経験を積んで魚のことを本気で思うちょる人間が、餌やりをすることによって、健康な魚、おいしい魚が育つんじやと思う」。「魚のことを本気で思う人間でなきゃ、健康な魚をつくれん」と言い切る。

餌付けから出荷まで、わが子を育てるような気持ちで片時も目を離さず、魚たちの成長を見守り、愛情を込めて育ててきた。いまでは、養殖は息子（長男）にまかせ、自らは資金繰りと販売ルートの確保にあたっているが、週に2-4回は自分で潜水し魚の健康状態をチェックする。毎日、朝と午後の2回、餌付けを行うが、3代目の息子が餌を撒く様子を時折アドバイスしながら見守る。魚の健康をチェックしながら、出荷サイズになるまで丁寧に育てる。

モジャコ（ブリの稚魚）が50gほどに成長すると、大変な作業が待っている。10年ほど前

から開発された予防接種を行うのである。1尾1尾に魚専用のワクチンを注射していく。10万尾ほどだと約20人の人手がいる。このワクチン注射のおかげで、それまで悩まされてきた魚特有の病気も出さず、抗生物質の使用量も3分の1で済むようになった。このように画期的な方法の予防接種ではあるが、日本での実施は（欧米では常識になっていたにも関わらず）遅れていた。そうしたなか、村松氏はいち早く取り入れている。

今年（2009年）の10月下旬には、大分市の府内町に居酒屋「かまえ直送活き粋船団」を出店する。小さなお店だが、蒲江と漁師が売りで、かまえ直送の魚料理で勝負する。すし屋やホテルで板前修業を積んできた次男が、板前として腕をふるう。長男が育てた魚を次男が捌く。生産から消費者の口まで、村松一家が責任を持ち、安心と美味を届けたいという。

村松氏のメルマガは評判を呼び、今や毎週日曜日に西日本新聞のコラム「食・農」を担当するまでになり、「豊後水道 奮闘記」と題して水産業界のことや魚の食べ方など思いの丈を多くの読者に伝えている。

### 5.3 蒲江ブルーツーリズムのヒットメーカー にみる仕事おこし・地域づくりの極意

3月5日午後は、急きょ悪天候に見舞われ、橋本正恵氏のヒアリングなどがほとんど出来なままに終わる。その残念な思いを吹き飛ばしてくれる資料が、インターネットで見つかった。「楽しんで暮らせる地域をつくる蒲江のヒットメーカー」と題した、同氏への興味深い

12) 「村松水産 健康な魚を、蒲江の海から全国へ」『Viento ～おおいの嵐～2004 Summer Vol. 5』(<http://www.pref.oita.jp/10400/viento/vol05/04.html>)。

取材記事<sup>13)</sup>が、それである。その後、彼女の半生を描いたご本(『海業』<sup>14)</sup>)を送っていただき拝読する機会を得た。以下は、これらの資料をもとに、見学当日の聞き取り時の感触、さらに電話での再調査も加えて、編集したものである。

### 会社設立は子育てのため

プールで泳ぐマンボウや天然の伊勢海老を目当てに、たくさんの加工客が訪れる蒲江、そうした魅力的な観光づくりに長年関わってこられたのが、橋本正恵氏である。860年前から続く半農半漁の家に育った彼女は、19歳で結婚し20歳で長男にも恵まれた。

しかし、家計は火の車。そこで、子どもを育てるために、自分で会社を立ち上げ仲買の世界に入る。手持ち資金ゼロで、乳児を抱えて時間的にも限られる中、自力での出発であった。真珠の珠入れの仕事でためた資金を頭金に軽トラックを買い、果物・野菜からスタートし魚介類の仲買へと進んだ。1970年に橋本正恵商店を立ち上げ、74年には丸二水産を設立する。全国へ販路を広げ、飛行機便を始める、活魚車での輸送を開発するなど創意的に経営を展開していく<sup>15)</sup>。立ち上げ当時、「なぜ、女性が金儲けを…」という冷やかな目もあり、仕事を手伝ってくれるのは女性たちしかいなかった。彼女たちは、仕事があることを喜び楽しんで働いてくれ、子育ても手伝ってもらった。

### 養殖・問屋業から民宿経営、そして観光協会会長に就任

今や、海ではブリ・アジ・クロの養殖、陸ではヒラメ・チョウザメ・フグの養殖や問屋業、さらに2軒の民宿まで経営している。海の体験民宿「まるに丸」は、1990年に開業したものである。

「まるに丸」は、自分の別荘に来たつもりになるようにと「おかまえなしの宿」にしている。豊富な海の幸を活かした料理を提供しているが、料理の準備と後片付けのみ行い、お風呂や寝床の準備はお客様にやってもらっている。また、各種の体験メニューを用意し、来客者が自分でつくって食べることもできる。

観光に関わるきっかけは、民宿を始めたことだった。やがて、蒲江町では観光協会の運営を民間に任せることになったが、この町で観光協会の仕事をするには、観光業のことも漁業のこともわかっていないと務まらない。そこで、両方をやっている彼女に白羽の矢が立った。1996年、蒲江町観光協会会長に就任する。

### マンボウの観光から「ひるめし部隊」誕生

観光協会会長になってから、丸二水産の定置網に珍しい魚がいろいろと入るようになった。1997年頃のことであるが、あるとき8匹のマンボウが網にかかる。マリカルチャーのプールは誰も利用しなくてもったいないと思っていたので、遊び心でプールにマンボウを入れてみた。すると、(ちょうど、彼女の民宿に宿泊していた8人の)記者クラブの方が、「マリカルチャーセンターのプールにマンボウが泳いでいる」と新聞に書きたててくれた。

すると、翌日から観光客が押し寄せてびっくり仰天する。すぐに、「せっかく蒲江まで来てくれた人たちを、お腹を空かせて帰らせるわけにはいかん！」との思いに駆られる。そこで、

13) 「楽しんで暮らせる地域をつくる蒲江のヒットメーカー 蒲江ブルーツーリズム研究会会長・橋本正恵さん」2006年9月21日, <http://www.oitarian.jp/oitajin/24.html>。

14) 三浦祥子『海業—橋本正恵の西野浦の物語—』マチまち物語ファンド、2006年。

15) 三浦祥子、前掲書。

観光協会の有志で「ひるめし部隊」を立ち上げ、マリンカルチャーセンターの前で料理を出すと、それも人気を呼び、ゴールデンウィークの間に9万3千人が訪れた。

#### ソフトクリーム販売から「伊勢えび祭り」へ発展

観光協会が民営化され、収益を上げなければならなくなったので、高平展望公園の里の駅でソフトクリームの販売を始めた。最初の3年ほどはうまくいくも、収益が上がらなくなる。そこで、まず高平に来てもらおう、そのきっかけにと、「伊勢えびを食べた人にソフトクリームプレゼント」キャンペーンを始めた。2001年のことで、それが「伊勢えび祭り」の始まりとなる。

「伊勢えび祭り」は大ヒットし、蒲江だけで3年続けた。伊勢エビは日豊海岸全域で獲れるので、4年目（2004年）からは（県境を越えて南隣の）宮崎県北浦町にも声をかけ、「東九州伊勢えび海道」と銘打って、さらに地域を拡大して展開することになる。北浦町と一緒にやろうと声をかけた頃、蒲江町内では公認の取り組みにはなっていなかった。ところが、北浦町が町役場あげての支援をするなか、蒲江でも行政の支援を得られるようになる。「北浦町長の早々の理解と全面支援が有難かった」と橋本氏は述懐する。

その3年後には、蒲江町が市町村合併で佐伯市蒲江町になったので、佐伯市全体でも進めることになる。

#### ブルーツーリズム研究会を立ち上げ、町民2割が参加

市町村合併に伴い、佐伯・弥生・鶴見・蒲江の各観光協会も合併することになった。そうすると、自分たちの独自色が語れなくなってしまう。そこで、橋本正恵氏は2006年1月、蒲江の人たちに声をかけて、「蒲江ブルーツーリス

ム研究会」を立ち上げた。有志だけでつくるこの会に、人口（8千人）の2割を超える1,800人が早速に登録した。この研究会の「一番の目的」は、「ここでふんばって生きていくために、自分たちで楽しめる地域をつくる」ことという。

地域自立の気概と人づくりでは、「地元芸能人」のチームづくりなど、いっその情熱を燃やす。男衆の太鼓チームが活躍するなか、それに感動した女性陣が女衆の太鼓チームを立ち上げることになった。フラダンスの会には、3歳から73歳までの元気な顔がみられる。

橋本正恵氏は、地域の人たちの祝福と共感のなか、内閣府の「平成18年度女性のチャレンジ賞」（全国で3名）を受賞した。また2008年には、「農林業家民宿おかあさん百選」にも選ばれている。県境を越えて南隣りに位置する延岡市の2009年の祭りには、延岡市長と一緒に女性として初めて神輿に乗ったという。北浦町をはじめ延岡市の地域づくりへのこれまでの貢献を称えてのことである。

#### 発想豊かな地域づくりの源

次々と沸いてくる地域づくりのアイデアと周りを引き込んで運動にしてしまう行動力、橋本正恵氏のそうした源泉はどこにあるのであろうか。

彼女は、「ちゃらんぼらん性格やから。それに、（大好きだった父や祖母をはじめ）いろんな人にかわいがられ、教えてもらったアイデアが頭や体に染み付いているから」という。

「美しい花と美味しい魚で、村の子どもや孫が土地に根付くような、また人が来たくなくなるような場所にしたい」といっていた祖母の思いが、いまや彼女に引き継がれている。

彼女の父は、次々と新しい漁に挑戦しモジャコ漁など村の生業の種を蒔いてきた。父の周り

にはいろいろな人が集まり、興行も受け入れて「濱屋の浜」で芝居などを打っていた。村の人たちも自ら芸名を付けて、芝居の役になりきって楽しんでた。「現地芸能人」あるいは「地元芸能人」といった呼称は、そういう人たちにつけられたものだった。それが21世紀の今、地域づくりの多種多様な担い手として蘇ってきているのである。そうした仕掛け人の橋本氏は創業時の頃をふりかえって、「あの（濱屋の）孫なら、あの娘なら悪いことはしない、という大目でみてもらい助けてもらいました」という。

ビジネスを超えたビジネス、それは今やNPOとかモハメド・ユヌスの「ソーシャル・ビジネス」などとどまらず、大企業の先進的経営などにおいても重要なテーマとなってきている。そうしたビジネス観に共通するものを、橋本正恵氏の経営観や実践の随所に感じるのは筆者だけではあるまい。

彼女の経営観を揺るがす事件が、何度か起こっている。その最大のもは、税務署による重加算税1億3,800万円の追徴(1991年)であった。脱税で摘発された延岡市のブローカーが、「ブリの仕入れは全部、橋本正恵から仕入れた」とのウソの告白によるものである。しかし、敢えて告訴せず、1日2-3時間の睡眠で身を粉にして働き貯めた金（祖母の夢を引き継ぎ西野浦に楽園を建設する資金）すべてを吐き出して支払った<sup>16)</sup>。なぜ告訴しなかったのか、と尋ねると、モジャコ漁は父が始め村の人たちの生業になったもの、もし告訴すればブリの仕入れに関わる村の人たちすべてに難がおよぶから、という。私的利益よりも地域全体の利益と思いを第一義にみたのである。そうした彼女の行動

が、地域の信用と連帯をさらに高めていくことになる。

橋本正恵氏をはじめ蒲江の女性たちが、やぶの中を切り開き続けてきたような創意的な試みの数々、その一つが祭りであった。「失敗しても行政に責任をとってもらわなければならない、失敗したら笑っておくれ」と、ダメ元で始めた地域おこしのイベントである。それが、共感の輪を広げ、周辺の地域や隣県にまで広がっていった。

蒲江の女性たちの深い絆と柔らかな発想、思い切りのいい度胸、そして近隣地域にまで成果を共有し広げていく度量の広さ、そうした中で的人間的な成長プロセスに学ぶべきことは深く大きい。

2006年8月には、橋本氏の「チャレンジ女性賞」受賞と小説『海業』出版の祝賀会が盛大に催されている。北浦ブルーリズムを引っ張る村田宮子氏は、「この本から、本当にいろいろと学ばせて貰っています」という。橋本正恵氏を師匠と仰ぎ、北浦ブルーリズムの一層の発展をめざしている。

#### 5.4 蒲江に学びつつ展開する北浦ブルーリズム

宮崎県の東北端に位置する延岡市北浦町は、リアス式海岸で有名な日豊海岸国立公園内に位置する自然豊かなところである。町のほぼ中央を東西に横断する山地によって、漁業の盛んな海岸部と農業を営む山間部に二分されている。

##### 「東九州伊勢えび海道」事業

日向灘に面した北浦は水産業が盛んで、北浦漁港は宮崎県下最大のまき網漁業基地である。北浦漁協は県内でもいち早く、地域漁獲物の付加価値の向上と販路拡大に取り組んできた。現在では、宮崎県認定水産物ブランド5魚種のう

16) 三浦祥子, 前掲書。

ち3魚種（北浦灘アジ、ひむか本サバ、宮崎カンパチ）を有して全国各地に流通しており、宮崎県のブランド魚として広く知られている。

また、日向灘では9～3月の期間、伊勢えび漁が解禁になり、多くの伊勢海老が水揚げされる。北浦町は2004年から大分県佐伯市（当時は蒲江町）と共同で「東九州伊勢えび海道」事業を実施しており、9～11月の期間に開催の「伊勢えび祭り」には海道筋の食事処では（地獲れ）伊勢えび料理が味わえる。蒲江町（橋本正恵氏ら）からの合同実施の働きかけで始めたものであるが、今や期間中には毎年1万人を越す来訪者が伊勢えび料理を楽しむなど、底堅い人気の定着がみられる。

#### ブルーツーリズム・ツアー

今も古きよき漁村の雰囲気の色濃く残している北浦町では近年、漁師の高齢化や担い手不足の問題など、まちの活性化が大きな課題となっている。北浦町には、定置網、底引き、巻き網など九州の近海漁法が全部あり、カンパチやブリなどの養殖漁業も盛んに行われている。

そこで目をつけたのが、「北浦ブルーツーリズム」である。宇戸田萬四郎氏が漁業経営の足しにできればと先行して取り組んでいたが、それを地域ぐるみで進めるようにしたものである。家族で漁業体験や塩づくり体験などが楽しめる1泊2日の観光メニューが考案された。あまり遠出しなくてもすむ定置網漁業と養殖漁業の見学および体験を中心としたメニューである。

場所は浜木綿村周辺で浜木綿ケビンを利用して、1日目は塩づくりと干物づくりの体験、郷土手料理教室、ふれあい夕食会（カンパチ解体）、2日目は定置網巻き上げの体験と解説、魚の選別体験、干物の袋詰めなどを楽しむというものである。2007年実験的に始め、11月に4回実

施したところ、23家族で92名（大人49名+小人43名）の参加を得て非常に反響が大きかった。



図2 子どもたちの定置網引き揚げ体験  
出所：<http://www.city.nobeoka.miyazaki.jp/display.php?cont=081202111305>

そこで、08年（11.22-23）にも、県補助なしで4回にわたって開催したところ、参加費が昨年の1人5千円（県補助活用）から大人8.5千円、小人7.5千円に大幅アップしたにもかかわらず、26家族90名（大人51名+小人39名）の参加を得て大いに盛り上がった<sup>17)</sup>。

（約2時間にわたる）定置網巻き上げの体験は、子どもたちに人気が高い。海風に吹かれながら養殖場へ向かい、海に浮かぶ養殖いけす（生簀）では船から餌やりを見学する。自動給餌機から餌が放たれるとブリが勢いよく跳ね、水しぶきが飛んでくる。帰りには、島をめぐりたつぷりと北浦の海を堪能する<sup>18)</sup>。

「漁業の醍醐味は実際に船に乗って体験してみないとわかりません」（延岡市商工観光部・児島謙二）とのこと。そこで、私たちも乗船体

17) 北浦ブルーツーリズム研究会「北浦ブルーツーリズムの概要」2008年12月。

18) 「ブルーツーリズム北浦町」（[http://www.kanko-miyazaki.jp/unit/tourism\\_07/index.html](http://www.kanko-miyazaki.jp/unit/tourism_07/index.html)）



験をすることにした。いまにも雨が降ってきそうな雲行きのなかの乗船であるが、何とか1時間ほど持ちこたえ、下船を雨が迎えてくれた。定置網は3か所に敷設されていて、巻き上げされた網に魚が一杯跳ねるのを見ると、わくわくドキドキする。漁獲量は、最盛期の1-2割程度で、潮の流れや水温などの変化が影響しており、水温が1℃上昇すると群れにならないという。刺身は3-5月の頃が一番美味しいとのことで、確かに、下船してすぐに目の前で捌かれる取れたての魚の刺身の味は、格別なものがあつた。

### 「後世に伝える北浦の味」活動

蒲江の地域おこし活動に刺激を受け、北浦でも「きたうら風景海道推進協議会」が発足したのは、2008年5月のことで、会長の村田宮子氏(53)は北浦町地域婦人連絡協議会会長でもある。

北浦町は海、山、川と自然環境に恵まれ、古江、市振、宮野浦、三川内などの集落ごとに育まれた独自の食文化を受け継いできた。しかし、そうした伝統文化も近年消えつつあつた。

宮崎日日新聞社の依頼を受け、村田宮子氏をはじめ北浦町婦人連絡協議会のメンバーが、今やつくらなくなりつつある料理の試食会を地域のシニア層(平均年齢75歳以上)を対象に開いたのは、2006年10月のことである。幼い頃や青春時代の懐かしい思い出話が尽きぬなど、参加者に大変喜んでいただいた。

シニア層が受け継いできた地域の伝統を、何とか記録に残したい。そうした思いが募る中、地域振興基金を活用した「市民まちづくり活動支援事業」(2007年から実施)を延岡市が公募したのである。村田宮子氏らは、「何とか私たちの手で埋もれゆく伝統的な食文化を掘り起こし、次世代に渡したい」との思いから、応募したところ、2007年8月10日、採用通知書が届

いた。

早速、婦人会員に趣旨を説明して、アンケート調査、昔から食べている料理について高齢者への聞き取りを行った。さらに、(作り方などの工夫やレシピ作りのための)試食会を何度も開くなど、地道な努力を重ねる。2008年3月、冊子<sup>19)</sup>(28品目、39ページ)にまとめあげ出版(800冊)した。「どこに出しても誇れる“地域の味”」との確信をもち、全戸に配布したとのことである。

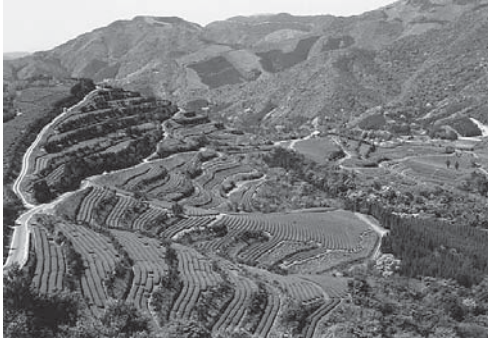
### 北浦魂と伝統的な味での地域おこし

村田宮子氏は、大阪の大学で学んでいる愛娘から「地域を愛する気持ちの大切さ、北浦の価値に気付かされた」という。2年前のことであるが、高校卒業にあたって、お嬢さんから「北浦が大好き」と言われた。習字を教える村田氏に、「母ちゃん、『北浦魂』を書いて」と頼んできた。それを、かばんや筆箱、ノートなどに貼って大切にしている。

北浦町では、北浦の伝統的な味をメニューに盛り込んだ、小さな食べ物屋「よし屋」が人気である。10席ほどしかないがお客が絶えず、市長も予約しないと入れない。1人世帯向けの食事メニューも工夫している。小パックで、120円/パックと低価格ゆえ、味とともに人気があり、ラジオの取材も受けている。以前は、奥さんが週末にドーナツをつくっていたが、旦那さんがリストラに会うなか、オープンしたものである。北浦の伝統的な味メニューは、村田さんらの提案を受けて始めたものという。

こうした試みは、別の料理屋の息子さん2人が、現地芸能人としてデビューするなど、他の食べ物屋にも大きな刺激となっているようであ

19) 北浦町地域婦人連絡協議会『後世に伝える北浦の味』2008年3月。



「北浦茶の里」にみる中山間地の美しい景観  
出所：<http://www.maff.go.jp/soshiki/koukai/muratai/21j/no11/mura03.html>

る。

中山間地の傾斜地では、冷涼な気候を利用して良質のお茶が栽培されており、露地早出し茶の産地として確立されている。農地の耕作放棄地化を防ぐため、北浦町では農業公社を設立し、そこからの派遣社員により町営の茶工場の運営も行っている。開墾された茶畑の風景「北浦茶の里」（北浦町地下）は、「第11回美しい日本のむら景観コンテスト」で農林大臣賞を受賞するなど、茶生産農家の意気込みを伝えている<sup>20)</sup>。

## 6 産業と地域の文化的な再生・創造

### 6.1 人間そのものの芸術化

J. ラスキンとW. モリスが提唱した「人間そのものの芸術化」という視点<sup>21)</sup>は、これまでみてきたブルーツーリズムによる人づくり・地

20) <http://www.maff.go.jp/soshiki/koukai/muratai/21j/no9/mura23.html>

21) ラスキンとモリス、とくにモリスの「人間そのものの芸術化」視点に光をあてたのは、本間久雄『生活の芸術化—ウィリアム・モリスの生涯—』銀書院、1946年。

域づくりがもつ意味、その新たな文化的価値を考察する上で、貴重な手がかりになるものである。

「人間そのものの芸術化」概念は、二つの側面から構成される。一つは人間そのものを芸術化することである。もう一つは、自らの周辺ものを芸術的にすることであり、文化的な伝統を継承・発展させることも含まれる<sup>22)</sup>。

### 現場労働にみる「ケの世界」と「ハレの空間」への変容

辛苦と煩勞の多い日々の工場労働は、汗や油・泥などにまみれた「ケ（褻）の世界」である。農林漁業の厳しくきつい労働現場も、同様である。しかし、こうした日常の現場労働には、俳優・役者の名演技と勝るとも劣らない迫力を内在していることも少なくない。

彼らの現場労働を公衆の面前に示す、いわば明るみに出すことは、まさに舞台に出すようなもので、日常の「ケの空間」が「ハレ（晴れ）の空間」に一変するのである。いわば、ケの世界にハレが潜んでいて、それを掘り起こすようなものである。

22) 「人間そのものの芸術化」の二つの側面については、美の教育的価値をめぐるラスキンの次のような指摘にもみられる。

「美に関するすべての教育は、第一に一人ひとりの子どもを取り囲む高潔で優しい人々の顔が示す美しさの中にあり、第二に野草、せせらぎ、野生生物、花、天空を意味する原野の美しさのなかにあります。これらがなければ、……、本来の人間らしい幸せは、決して得られないのです。」(池上惇『文化と固有価値の経済学』岩波書店、2003年、5ページ、J. Ruskin, *The Laws of Fésole*, 1879, in E. T. Cook and A. Wedderburn, eds. *The Works of John Ruskin*, Vol. XV, George & Allen, London, 1904, P. 438)。

ケからハレに工場空間および労働が一変するという視点は、愛知県瀬戸市でも老舗を誇る一貫陶磁器工場の窯場で開催したコンサートの事例から得たものである<sup>23)</sup>。生産停止した直後に、その記念にと催したコンサートは、ガス窯への最後の火入れを合図に始まった。演奏の音色が工場空間に響き渡った瞬間、工場空間がコンサートホールに一変したのである。火入れに携わったシニア窯焚き職人にとって、数十年にわたる日々の労働では感じたことのない工場空間の変容であった。まさに瞬時にして、芸術空間への変身を遂げたのである。

### 卑下する労働から誇りある労働への転化

漁師や農民、工場労働者の働く姿、汗にまみれた顔そのものが、芸術的である。現場労働の担い手、すなわちつくり手が芸術家になるのである。彼らにとって、ケの世界としてみなし卑下していた労働が、自らを高める尊厳ある労働に転化するのである。誇りある労働は、生活の質を高め消費者の生活も変えていく。

### 人を高めるビジネスへの変化

ラスキンは、「つくり手が芸術家になる」といい、芸術的要素を入れて初めて経済的行為の意味がわかるという。労働者のみならず消費者も含めて、それに関わった人の生活の質を高めるのである。ビジネスの質が変化する。すなわち、人を高めるビジネスへ変わるのである。

### 体化された文化資本を掘り起こす自由空間

一人ひとりの漁師に体化された文化資本は、現場で働き生活を生き抜くなかで形成されたものである。それらは、ケの世界に閉じ込められていると埋もれたままになるが、自由空間、公

共空間に出すと違った色合いになる。

汗を流す労働や地道な下積み、煩勞が敬遠され、そうしたことへの耐久性が低下している今日、それらのケの世界に光をあて、誇りある労働へ、ハレの空間へと変化させる意識的な取り組みが必要になっている。

機械設備を使いこなす熟練技能を、若者に身につけさせる工業の訓練プロセスにおいても、同様の傾向がみられる。例えば、マシニングセンターの実技教育では、まず、それを動かすプログラムを自ら設定して一応使えるようにさせる。運用していくうちに（すなわち働くという舞台にまず上がって演ずるうちに）、自らの限界に気づき、深く学び直して高める必要性を自覚するようになる。そこから、本格的な訓練がなされるという。

### 地域と自らを変える構想力と意欲を高める交流・見聞

海業においても、外に開かれた雰囲気、現代という一つの時代のなかで出てくる。交通・通信ネットワークの発達に伴い、人々が交流しいろいろな世界を見るなか、地域の個性的な良さに気づき自分自身を変える構想力と意欲を高める。

## 6.2 人間を取り巻く環境の芸術化

人間そのものを芸術化させるもう一つの側面、すなわち自らの周辺そのものを芸術的・文化的に高めていく営みに注目しよう。海洋、海岸といった自然環境の中であって、漁師の生業を媒介にして自然を変え自然と共生しながら生活が営まれる。農村、漁村といった生活・労働環境としての地域が、人間と共生しながら変化していくのである。

人間の創造的活動の源泉、信託財産としての自然海そのものと漁業が営まれている海とは、異

23) 十名直喜『現代産業に生きる技—「型」と創造のダイナミズム—』勁草書房、2008年、261ページ。

なる。自然と人々の関わりのなかで、その地域に景観的価値や居心地の良さなどが生み出されてくる。こうしたものは、自然が人間に与えてくれる喜び、いわば信託財産である。信託財産としての自然は、人間の創造活動の源泉である。

近海漁業においても、多様な技術や技能が活かされ、乱獲を制御し自然と共生しながら営まれている。海岸など自然景観の良さは、人間にさまざまなものを提供してくれる。自然に敬意と感謝をささげながら、自然の贈り物を受け取るのである。ラスキンのこうした視点は、日本の伝統的なアニミズムの思想と共通するものがみられる。

技術が発達するなか、人々と文化の移動や伝達が進む。技術を通じて、人間は自然と向き合う。そこに、一種の異文化間交流が生まれる。都市文化と田舎文化が交流し、人間同士が学び合う。農山漁村では都市のニーズは何かを知り、都市住民は自然の豊かな恵みを享受しつつ持続的に支えていく大切さを実感する。

### ブルーツーリズムと文化産業創造

ブルーツーリズムを通して、漁業の現場を人びとにみてもらう、舞台にのせるということは、漁業と観光業の新たな結合（いわば「海業」）に他ならない。漁業の営み、自然とのかかわりの中に文化的・芸術的価値を見出す活動、いわば文化産業の創造活動といえよう。

漁師や地元の人々が生業を通して自然と付き合うなかで景観やアメニティの価値を高め、そうした創造的な成果が情報発信される。それを知った他地域の住民が、それを学び享受しようと訪問してくる。また、映像や音楽、芸術作品などを通して情報が提供され、他地域のみならず地元住民にも伝達され、認識が共有されるようになる。リピーターなど持続的な交流を通し

て、田舎の人材も都市の新しい生き方をより深く理解するようになる。こうした異文化交流のプロセスを通して、新しい産業文化が生み出される。

### 6.3 従来型産業・地域を変革する芸術文化創造型産業

#### 海業は芸術文化創造型産業

地域の生業である漁業に観光業を結びつけた海業は、一種の芸術文化創造型産業に他ならない。日本でも屈指のリアス式海岸と豊かな漁場、美しい自然景観に恵まれ、そこで育まれた多様な浦文化など固有の伝統・歴史・文化と結びつけた多彩な活動、漁師や地元住民を舞台に引き出す取り組みは、地域に固有な文化的価値を掘り起こす新たなタイプの産業・地域創造とみなすことができる。

#### 文化産業の三層構造とその重層的形成

漁業と海洋資源、自然景観を核にして、その創造的な営みが情報・通信や交通などインフラ産業を媒介にして、他地域の住民に発信され、訪問・参加など産業観光的な多様な関わりを通して、重層的な文化産業が形成される。こうした「創造的成果とその享受」が多様なかたちで層的に編成されるのである。

文化産業を三層構造からなる同心円モデルとして捉える視点は、現代産業のあり方と特徴を考える上で興味深いものがある。三層構造からなる文化産業の同心円モデルを最初に提示したのはD. スロスビー<sup>24)</sup>で、産業モデルの中核には創造的な芸術を据えている。

24) Throsby D. (2001) *Economic and Culture*, Cambridge University Press (『文化経済学入門』中谷武雄・後藤和子監訳、日本経済新聞社、2002年、178-180ページ)。

一方、この文化産業モデルを、芸術にとどまらずより広義の視点から捉え直したのが、池上惇氏である。芸術文化創造型産業を、スロスピーにみるような「創造的な芸術」にとどめず、第1次産業や2次産業など従来型産業における文化的価値の創造をも視野に入れて捉えている<sup>25)</sup>。現代産業のあり方を考える上で示唆に富んでおり、本章はそこから学ぶところが大きい。

まず、三層構造の中核に位置するのは芸術文化創造型産業（第1層）で、実演芸術やデザイン創造およびその拠点づくり、科学技術の創造的開発などがある。

コアをなす第1層（芸術文化創造型産業）の周囲には、それが生み出す芸術文化情報を発信し、さらにそれを学習し享受するシステムを担う産業が多様に形成される。複製・編集を担う出版・印刷やコンテンツ産業、複製されたものを産業や生活の中に伝達する産業、さらにそれらを活用した学習・教育システムを担い享受能力を高める産業など、情報発信・享受型産業（第2層）が重層的に形成される。

さらに、第1層と第2層の周囲には、両者を結ぶ訪問・参加型産業（第3層）が形成される。享受者が情報収集や学習によって「本物」への関心を高め、創造の拠点を訪問し、現地での多様な交流が生み出される。そうした訪問・交流を支える交通・エネルギー・環境等のインフラや観光・輸送産業などが、重要な役割（パイプ役や受け皿役）を担うのである。

#### 従来型産業を変革する芸術文化創造型産業

芸術文化創造型産業は、一方では三層構造にみるように、関連産業との関係の中に位置づけられ、関連する多様な関連投資によってサポー

トされる。他方では、芸術文化の要素によって、従来型産業を変革する。従来型産業が有する伝統的な生産方法や創意工夫、生活の知恵なども、芸術文化創造型産業のアイデアやノウハウの源泉となる。

例えば、農産物も、形・色彩・味など芸術文化的要素が重視され、伝統的な生産・保存の方法とブレンドした新たな味覚や芸術性の開発などが促される。都市では味わえない創造性をもつようになり、体験型農林漁業にみるように生産と消費の一体化による魅力などによって、第1次産業およびそれを担う地域は、文化産業および拠点地域としての性格が加わり、衰退産業・地域から発展の可能性を内在する創造型産業・地域へと変身するのである。

第2次・3次産業においても、例外ではない。製造業においても、デザインの芸術性はいっそう重要性を増し、先進的工場はものづくりの場にとどまらず、創造的労働の場、生産者と消費者をつなぐ体験学習・交流の拠点へと変身する様相をみせている。いわば、製造業とサービス業の融合が出てきている。最近、品質・安全などで注目される工場野菜は、農業と製造業の融合の流れとして興味深い。

#### 現代産業の推進力としての芸術文化創造型産業

こうして、従来型産業は、芸術文化の創造性を持ちこむことによって、変革される。さらに、従来型産業に内在する芸術文化性も、新たな芸術文化を創造する源になる。そうした産業発展のあり方が、自然な流れになる。芸術文化創造型産業は、従来型産業から学び、それらを変革しながら多様な関連産業を発展させ、それらに支えられて現代産業の推進力になるのである。

25) 池上惇, 前掲書, 119-124 ページ。



## 7 おわりに

九州における農林漁業とそれを担う地域をめぐる環境は、極めて厳しいものがある。第1次産業の就業者割合(2005年)は8%(53,9万人)で、全国平均の5%に比べて高い。1次産業の潜在力は大きなものがあるが、中山間地などで過疎化・高齢化が進み後継者がいないといった深刻な問題に直面している。

九州7県における65歳以上の就業者比率(1991年→2005年)は、農業29.4%→55.6%、漁業13.9%→30.1%となっており、高齢化の波が押し寄せている。1次産業においては近年、農業(熊本県苓北町や高森町など)や畜産業(鹿児島県長島町や熊本県菊池市など)で、アジア人研修生の受け入れを始めている市町村もみられる<sup>26)</sup>。

そうしたきびしい現実に敢然と立ち向かい、楽しく創造的に仕事おこし・地域づくり・人づくりを展開している地域もみられる。今回は、ブルーツーリズムによる地域あげでの興味深い実践モデルをとりあげた。

宮崎を早朝に出発し、午前中は北浦で「蒲江・北浦大漁海道」に関する見学・ヒアリング調査を行った。北浦ブルーツーリズムについては、延岡市商工観光部の児島謙二氏ならびに「きたうら風景海道推進協議会」会長の村田宮子氏、延岡市北浦町地域振興課商工観光係の工藤信廣氏から説明していただいた。

児島謙二氏には、市役所の殻を越えての地域への熱い思いを語っていただいた。また、村田宮子氏のアイデアあふれるパワフルな活動と出会いに、深い感動を覚えるとともに、地域再生に向けた確かな鼓動を感じた次第である。村田氏

には電話での再取材にも丁寧にお応えいただいた。宇多田萬四郎氏の、今にも雨が降りそうな中での定置網漁見学も新鮮な体験だった。

なかでも、工藤信廣氏には、全般にわたり温かく行きとどいた配慮を賜った。移動手段を自動車に依存せざるをえない中、延岡駅から蒲江に至る間ずっと、荷物を抱えての私ども5人を運んでいただくなど、そのご厚意は有難く感謝にたえない。

北浦固有の自然、そこで育まれた生業の伝統と文化、それらを掘り起こして現代的な光をあて地域再生に生かしていく試みは、大変貴重なもので、必ずや北浦の新たな展開に向けた力になると思われる。

3月5日午後の蒲江ブルーツーリズムの見学は、あいにくの雨で、せっかくの「ブリ養殖体験」ができなかった。また、「かまえブルーリズム研究会」会長で「あまべ渡世大学」学長でもある橋本正恵氏からのヒアリングも、雨などで急きょ順番が変わり、現場での立ち話に終わってしまった。しかし、立ち話ながらも、現場での口ぶりから、地域を切り拓く女性リーダーとしての心意気と迫力を感じた次第である。彼女には、その後も2回にわたる電話でのご教示、そしてご本(『海業』)もいただくなど、大変お世話になった。

佐伯市観光協会事務局次長の古田浅男氏より、「かまえ喰彩伊勢海老まつり」から「浦スイーツ王選手権」に開催による日豊海岸の食材開拓、さらに「浦ルネッサンス・プロジェクト」による浦リゾートの手づくり開発などに至る様々な活動を実に興味深く聞かせていただき、「地域番頭」としての自覚と心意気に感銘を受けた。

村松一也氏の奮闘ぶりも目を見張るものがあった。小論(第1次稿)に目を通していただ

26) 日本経済新聞、2008年10月29日付。

き、電話での再取材でも貴重なご教示をいただいた。漁師として自社の経営のみならず、「かまえ直送活き粋船団」を束ね、インターネットなどを駆使しての新たな経営スタイルの開拓、そして鉢巻姿でのご活躍などに心からの拍手を送りたい。

国交省九州地方整備局の藤川睦夫氏には車を提供していただき、長時間にわたり雨天下の足を確保できた。また、佐伯市企画商工観光部観光推進係主任の高木氏には、この間のきめ細かな手配などにご尽力いただき感謝にたえない。おかげで、悪天候のなかにもかかわらず、実に意義深い調査見学をすることができた。

悪天候と行事の重なるなかの見学にもかかわらずご尽力いただいた関係者の方々に、心からお礼申し上げたい。

また、現代産業研究会（2009年9月）において小論（草稿）を報告した際に、恩師（池上惇、まちづくり・文化政策大学院準備室長・京都大学名誉教授）からいただいた幾つかの示唆が、小論を仕上げるにあたり大変参考になった。

蒲江と北浦の両地域は、東九州の辺鄙な地でありながらも豊かな自然環境に恵まれ、そこで育まれてきた固有の伝統・歴史・文化と結びつけ、「蒲江・北浦大漁海道」というコンセプトを軸に、地域再生に向けた創意的な地域づくり・人づくりの活動を展開されている。その一端を垣間見る機会に浴し、関係者の方々の熱く、温かな思いを一杯味わいながらの見学・ヒアリングであった。そうした思いに後押しされての小論が、その文化的価値に少しでも光をあてることができれば、それに勝る喜びはない。

〈付記〉

小論は、サステイナブル産業・地域研究会

調査報告書（1）『東九州のツーリズムと交通・情報インフラ』（名古屋学院大学総合研究所・ディスカッションペーパー第83号、2009年10月）所収の拙稿「ブルーツーリズムによる地域づくり・人づくりのダイナミズム—辺境から交流拠点への変身進む蒲江・北浦大漁海道（日豊海岸）—」をベースにして、加筆・修正（理論的な整理）を行ったものである。

## 参考文献一覧

J. Ruskin, *The Laws of Fésole*, 1879, in E. T. Cook and A. Wedderburn, eds. *The Works of John Ruskin*, Vol. XV, George & Allen, London, 1904.

Throsby D. (2001) *Economic and Culture*, Cambridge University Press (D. スロスビー『文化経済学入門』中谷武雄・後藤和子監訳、日本経済新聞社、2002年)。

池上惇『文化と固有価値の経済学』岩波書店、2003年。  
北浦町地域婦人連絡協議会『後世に伝える北浦の味』2008年3月。

北浦ブルーツーリズム研究会「北浦ブルーツーリズムの概要」2008年12月。

大毎朝読新聞、2009年2月24日付。

十名直喜『現代産業に生きる技—「型」と創造のダイナミズム—』勁草書房、2008年。

日本経済新聞、2008年10月29日付。

日豊海岸シーニック・バイウエイ研究会『日豊海岸シーニック・バイウエイ（蒲江・北浦大漁海道）』日本風景街道 登録申請書、2007年11月26日（登録日）。

日本風景街道戦略会議（2005年12月）「日本風景街道の実現に向けて—美しい国土景観の形成をめざした国民的な運動を—」

(<http://www.mlit.go.jp/road/sisaku/fukeikaidou/img/siryou/no4/teigen.pdf>)

本間久雄『生活の芸術化—ウィリアム・モリスの生涯—』銀書院、1946年。

## 産業・地域の文化的創造とブルーツーリズム

三浦祥子『海業―橋本正恵の西野浦の物語―』マチ  
まち物語ファンド，2006年。

「蒲江の魂，ブルーツーリズム」2006年12月7日，  
([http://gazoo.com/G-Blog/mura\\_kamae/2846/  
Article.aspx](http://gazoo.com/G-Blog/mura_kamae/2846/Article.aspx))

「楽しんで暮らせる地域をつくる蒲江のヒットメー  
カー 蒲江ブルーツーリズム研究会会長・橋  
本正恵さん」2006年9月21日，[http://www.  
oitarian.jp/oitajin/24.html](http://www.oitarian.jp/oitajin/24.html)。

「ブルーツーリズム北浦町」([http://www.kanko-  
miyazaki.jp/unit/tourism\\_07/index.html](http://www.kanko-miyazaki.jp/unit/tourism_07/index.html))

「ブルーツーリズムとは」[http://www.mlit.go.jp/crd/  
chirit/blue-t/bt.htm](http://www.mlit.go.jp/crd/chirit/blue-t/bt.htm)。

「村松水産 健康な魚を，蒲江の海から全国へ」  
『Viento ～おおいの嵐～2004 Summer Vol.  
5』([http://www.pref.oita.jp/10400/viento/  
vol05/04.html](http://www.pref.oita.jp/10400/viento/vol05/04.html))。